

高校生における教師への心理的距離と学校適応に関する研究

中 武 章 子¹⁾

佐 藤 静 一²⁾

要 約

本研究では、高校生を対象として、教師への心理的距離と学校適応との関係を検討した。生徒の教師への心理的距離の測定には LPC (Least Preferred Coworker) 尺度を用いた。その結果、教師への心理的距離が小さい (LPC 得点が高い) 生徒の方が、心理的距離が大きい (LPC 得点が低い) 生徒より、「教師関係」「進路意識」「規則への態度」「学習意欲」及び「学校適応全体」において高くなる傾向が見い出された。また、関係がうまくいく教師に対して高い評価をしている (MPC 得点が高い) 生徒は、MPC 得点が低い生徒よりも、「特別活動への態度」等、及び「学校適応全体」において高くなる結果が見い出された。

キーワード：高校生、心理的距離、学校適応、生徒と教師の関係

問 題

学校において、児童・生徒にとって重要な存在である教師との人間関係は生徒の学校適応において大きな意味をもつと考える。本研究では、生徒と教師との人間関係の中でも心理的距離に着目し、生徒の教師への心理的距離と学校適応との関係について分析を行ったものである。

白樫 (1985) は Fiedler & Chemers (1984) の LPC 尺度を翻訳し、一部改良を加え、日本語版 LPC 尺度を作成した。Fiedler のリーダーシップの条件即応モデルにおいては、リーダーシップ・スタイルが、最も苦手とする仕事仲間 (LPC: Least Preferred Coworker) に対する好意的印象 (寛容さ) によって測定された。LPC 得点が平均値よりも高得点の者を「高 LPC」(寛容度大)、低得点の者を「低 LPC」(寛容度小) とされた。つまり、「高 LPC」の人は関係動機的で、仕事を一緒にするのが苦手ではあるが、だからといって、その人物を、例えば、それ程「冷たい、

敵対的、思いやりのない、不親切」…等々とは思わないタイプであると解釈される。逆に、「低 LPC」の人は課題動機的で、苦手とする仕事仲間を、非常に「拒否的、冷たい、陰気、不親切」…等々と、よりネガティブに評価するタイプである。つまり、仕事の面でいらさせられる人に対して、その人のよさを見ることが相対的に出来ないタイプと解釈される。

ところで、Fiedler のリーダーシップ効果性に関する初期の研究では、リーダーシップ・スタイルを、相対立する 2 人の人物のパーソナリティの評定、すなわち ASo (Assumed Similarity between Opposites) によって行われた。つまり、2 人の人物、仕事を一緒にする上で「最もやりやすい相手」MPC (Most Preferred Coworker) と「最もやりにくい相手」LPC、に対する評定を求め、各項目ごとに、2 つの評定値の差を全項目通して合計する。この合計値 (Aso 得点) が小さいほど 2 人の人物のパーソナリティの類似性は高く (両者を厳しく区別せず、寛容度が高い)、反対に、その合計値が大きいほど 2 人の人物のパーソナリ

1) 鹿児島大学大学院人文社会科学部研究科

2) 久留米大学文学部心理学科

ティ認知の類似性が低い（両者を厳しく区別する）と想定された。しかしその後、MPC 得点（肯定的評価）にはそれ程大きな個人差がみられなかったのに対し、Aso（両者の類似度）と LPC 得点との間にはプラスの.80～.90の高い相関があり、Fiedler の一連の研究では、互いに互換性のある指標として用いられた。すなわち、Aso 得点の代わりに LPC 得点を用いることになるのである。LPC 得点の意味としては、前述した、高 LPC は関係動機型、低 LPC は課題動機型として解釈される。なお、Fiedler は、この LPC 尺度を創始した頃、これを「心理的親密さの一般化された指標」として解釈していた。LPC 得点が低いということは、リーダーが自分自身と集団成員との間にある種の心理的壁をつくり得るのではないかと考察された。逆に LPC 得点が高いということは、他者との間に社会的・心理的距離を置かない傾向を示すものと解釈された（白樫、1985）。

ところで、これまで教師のリーダーシップ・タイプと学校モラルとの関係については多くの研究が行われてきた。例えば、三隅（1984）等は、リーダーの行動を目標達成（Performance）と集団維持（Maintenance）の二つの次元から測定し、その行動を発揮している程度に応じて、リーダーを PM、P、M、pm の4つのタイプに分類された。そして、こうしたリーダーシップ・タイプが集団のメンバーの意欲や満足度、ならびに学校適応等に及ぼす影響について一連の研究を行ってきた。学校における教師のリーダーシップについては、三隅・吉崎・篠原（1977）、三隅・矢守（1989）をはじめ、佐藤・篠原（1976）、佐藤（1993）、佐藤・服部（1993）等によって、小・中学及び高校教師のリーダーシップを測定するための項目を作成し、その妥当性が検討されてきた。その結果、「学習意欲」「授業満足度」「学級への帰属度」「学級連帯性」「生活・授業態度」等々の学校モラルに関し、PM 型教師の下で最も得点が高く、次いで M 型、P 型と続き、pm 型において最も低くなることが見い出された。

なお、学校モラルについて、松山・倉智（1967）は、児童・生徒の学校や学級への帰属感、安定感等を基礎とした学校や学級での諸活動に対する積極的で意欲的な心理状態を指すものであると述べている。また、内藤・浅川・高瀬・古川・小泉（1987）は、この尺度によってあらわされる学校モラルの水準は、児童・生徒の学校や学級への適応感を反映するものであるとしている。

しかるに、こうした教師のリーダーシップ・タイプ

が学校モラルの高低をもたらす背景には、児童・生徒達の教師に対する心理的距離（壁）が大きく関わっていることが考えられる。例えば、教師の指導態度と心理的距離に関する、山口・米田・原野（1993）の研究によれば、ある教師の指導態度を民主的・受容的・情熱的であると認知している生徒達は、教師の指導態度を非民主的・非受容的・非情熱的であると認知している生徒達よりも、その教師との心理的距離が身近であると認知している。また、権威的な指導態度が顕著であると認知・評定している教師との心理的距離は、非権威的な指導態度をとっていると認知している教師の場合に比べ疎遠であるとの結果を見出している。

本研究では、Fiedler の研究におけるリーダーと集団成員との関係を、生徒と教師との関係に当てはめ、生徒の教師に対する LPC 得点、すなわち、教師達に対する生徒の“リーダーシップ（スチューデント）・スタイル”（心理的距離：寛容度）を測定し、学校適応との関係を分析せんとしたものである。つまり、生徒にとっての LPC（今まで出会った教師のなかで、最も相性が悪い教師・馬が合わない教師・関係がうまくいかない教師）、及び MPC（最も相性が良い教師・馬が合う教師・関係がうまくいく教師）のパーソナリティの評定と学校適応との関係を分析せんとしたものである。また、学校適応における LPC 得点と MPC 得点の交互作用及び男女間の差についても併せて分析を行った。

本研究の仮説は以下の通りである。

仮説 1. 高 LPC の生徒は、低 LPC の生徒よりも全体的に学校適応感が高いであろう。

仮説 2. 高 MPC の生徒は、低 MPC の生徒よりも全体的に学校適応感が高いであろう。

方 法

1. 調査対象

公立高校 1 年生 111 名（男子 54 名、女子 57 名）

2. 調査方法

高校側に依頼し、担任による学級単位の集合調査法によって行われた。

3. 調査時期

平成 14 年 10 月下旬

4. 調査内容

① LPC 及び MPC 得点の測定 白樫（1985）の LPC 尺度を一部修正し、18 項目（各項目 8 段階尺度）の質問紙に回答を求めた。

② 学校適応の測定 内藤・浅川・高瀬・古川・小泉

(1987)により作成された、高校生用学校環境適応感尺度36項目(非常によくあてはまる～全くあてはまらないの5段階尺度)の一部語句を修正・改組した質問紙に回答を求めた。内藤らは、『学習意欲』『友人関係』『進路意識』『教師関係』『規則への態度』『特別活動への態度』の6因子を抽出し、その妥当性と信頼性が検討されている。この尺度は、病理的にはなく、高校生の学校適応・不適応を測定でき、また、各領域別に得点を出すこともできるので、多面的に学校適応・不適応をとらえることができる。

結 果

1. MPC 得点及び LPC 得点の実態

MPC 得点は全体平均で116.12 (SD=13.52)であった。この結果をもとに、MPC 得点が全体平均を上回る59名を「高 MPC」群、下回る52名を「低 MPC」群とした。また、LPC 得点は、全体平均が63.95 (SD=20.99)であった。MPC 得点と同様にこの結果をもとに、「高 LPC」群(56名)と「低 LPC」群(55名)に分けた。

また、ASo を測定するため、MPC 得点と LPC 得点の差を全項目通して合計した得点 (ASo 得点) を算出した。そして、LPC 得点と ASo 得点、MPC 得点と LPC 得点、MPC 得点と ASo 得点の相関係数を求めた。LPC 得点と ASo 得点の相関係数は -0.843 、MPC 得点と LPC 得点の相関係数は -0.015 、MPC 得点と ASo 得点の相関係数は -0.550 であった。

2. 学校適応の因子分析結果

学校適応の調査項目36項目についての因子分析の結果を示したものが表1である。因子分析の手法は、主因子法によって因子を抽出した後、バリマックス回転を施す手法を用いた。1つの因子に、.417以上の因子負荷量を示し、他の因子が.417未満の因子負荷量を示す項目を基に、各因子の解釈を行った。その結果、第1因子に高い負荷量を示す項目は、「私には、この学校で何でも相談できる先生がいる」「私には、まるで友達のように親しみを感じる先生が、この学校にいる」などの8項目であった。これらは、『教師関係』の因子と命名された。第2因子に高い負荷量を示す項目は、「将来になりたい職業を決めている」「私の、進路目標は明確である」などの4項目であった。これらは、『進路意識』の因子と命名された。第3因子に高い負荷量を示す項目は、「私は、部活や学級活動や学校行事等に積極的に、一生懸命取り組んでいる」「私は、学級

活動や学校行事には、みんなと協力してやっている」などの6項目であった。これらは、『特別活動への態度』の因子と命名された。第4因子に高い負荷量を示す項目は、「私は、あまり意識しなくても、規則を守れる方だ」「私は、学校の規則を真面目に守っている」などの4項目であった。これらは、『規則への態度』の因子と命名された。第5因子に高い負荷量を示す項目は、「私は、ユーモアのある人間である」「私は、性格的に明るい方である」「私は、人あたりがよく、社交的な方である」の3項目であった。これらは、『明朗さ』の因子と命名された。第6因子に高い負荷量を示す項目は、「私は、勉強に積極的である」「私は、勉強の目標を持って、毎日コツコツと努力している」の2項目であった。これらは、『学習意欲』と命名された。

3. MPC の高低及び LPC の高低と学校適応

性・MPC の高低・LPC の高低を3要因とする分散分析を行った(表2)。その結果、まず『教師関係』において LPC の高低の主効果に傾向差 ($F(1,103)=3.22, p<.10$) がみられた。『進路意識』では、MPC の高低の主効果に有意差 ($F(1,103)=3.87, p<.05$)、LPC の高低の主効果に傾向差 ($F(1,103)=2.98, p<.10$)、性×MPC の高低の交互作用に傾向 ($F(1,103)=3.08, p<.10$) がみられた。『特別活動への態度』では、MPC の高低の主効果に有意差 ($F(1,103)=11.01, p<.01$)、性×MPC の高低×LPC の高低の交互作用に傾向 ($F(1,103)=2.81, p<.10$) がみられた。『規則への態度』においては、LPC の高低の主効果に傾向差 ($F(1,103)=2.71, p<.10$) がみられた。『明朗さ』においては、性×MPC の高低×LPC の高低の交互作用に傾向 ($F(1,103)=2.78, p<.10$) がみられた。『学習意欲』では、LPC の高低の主効果に傾向差 ($F(1,103)=3.16, p<.10$) がみられた。『学校適応全体』においては、MPC の高低の主効果に有意差 ($F(1,103)=5.92, p<.05$)、LPC の高低の主効果に傾向差 ($F(1,103)=3.42, p<.10$)、性×MPC の高低×LPC の高低の交互作用に傾向 ($F(1,103)=2.81, p<.10$) がみられた。MPC の高低に差が認められた『進路意識』、『特別活動への態度』、『学校適応全体』では、すべて高 MPC の方が低 MPC に比べ学校適応が高い結果となった。また、LPC の高低に差が認められた『教師関係』、『進路意識』、『規則への態度』、『学習意欲』、『学校適応全体』でも、すべて高 LPC の方が低 LPC に比べ学校適応が高い結果となった。

表 1 学校適応の因子分析

項目	I	II	III	IV	V	VI	共通性
21, 私には, この学校で何でも相談できる先生がいる。	.81	.15	.14	.11	.00	.03	.74
26, 私には, まるで友達のように親しみを感じる先生が, この学校にいる。	.70	.18	.06	.22	.12	.36	.69
11, 私は, この学校の先生と気軽に話せる。	.69	.11	.04	.03	.21	.09	.76
28, 私は, この学校の先生と話をする機会を持つようとしている。	.67	.16	.13	.24	.09	.04	.66
8, 私は, この学校の先生を信頼している。	.51	.17	-.02	.17	-.04	.08	.67
14, 私は, この学校の先生によく質問する。	.47	.05	.17	.01	.22	.20	.66
6, 私は, この学校の先生に対して素直である。	.42	.13	.11	.28	.09	.16	.68
35, 私は, 勉強が楽しいと思う。	.42	.07	.21	.17	.06	.38	.77
18, 私は, 自分の進路について, 本や資料などでよく調べる。	.30	.10	.02	.01	-.03	.13	.56
12, 私は, 将来なりたい職業を決めている。	.12	.84	.15	.13	.04	.05	.82
9, 私の, 進路目標は, 明確である。	.20	.83	.07	.24	-.01	.07	.82
15, 私は, 自分にあった進路を考えている。	.13	.68	.11	.08	.16	.11	.65
24, 私は, 自分の将来に希望をもっている。	.12	.53	.08	.08	.28	.18	.63
4, 私は, 自分の進路のことを真剣に考えている。	-.02	.39	.12	.12	.12	.27	.57
27, 私は, 悩みを聞いてくれたり, 何でも話せる友人を, この学校で持っている。	.19	.20	.11	-.18	.15	.08	.56
33, 私は, 部活や学級活動や学校行事等に積極的に, 一生懸命取り組んでいる。	.17	.18	.72	.26	.17	.06	.73
3, 私は, 学級活動や学校行事には, みんなと協力してやっている。	.03	.05	.62	.04	.27	.18	.66
19, 私は, 部活や学級活動や学校行事に楽しさを感じる。	.10	.19	.61	.11	.11	.03	.73
31, 私は, 学級活動や学校行事に, 自主的に参加している。	.18	.12	.59	.19	.17	-.02	.62
7, 私は, 部活や学級活動や学校行事を怠らないでまじめにやっている。	.07	.11	.55	.19	-.02	.20	.57
1, 私は, 好きな部活に所属し, その活動に充実感をもっている。	.14	.31	.43	.02	-.02	.08	.51
32, 私は, あまり意識しなくても, 規則を守れる方だ。	.11	.13	.12	.83	-.04	.07	.79
34, 私は, 学校の規則を真面目に守っている。	.14	.21	.11	.80	.04	-.00	.76
30, 私は, 規則を守らなければならないという自覚を持っている。	.20	.14	.15	.65	-.04	.10	.75
17, 私は, 規則に対して不満がない。	.19	.21	.08	.43	-.09	.15	.58
36, 私は, 学校の規則があるのはあたりまえだと思う。	.21	-.00	.24	.34	-.06	-.01	.57
22, 私は, 家庭学習を, 毎日時間を決めてやっている。	.22	.11	.08	.30	-.08	.25	.64
13, 私は, ユーモアのある人間である。	.15	.06	.12	-.08	.76	-.03	.66
16, 私は, 性格的に明るい方である。	.11	.12	.29	.05	.62	-.12	.64
10, 私は, 人あたりがよく, 社交的な方である。	.14	.17	.24	.02	.48	.13	.63
23, 私は, 多くの友人をこの学校に持っている。	.17	.21	.28	-.08	.31	.11	.63
2, 私は, 明るく, 楽しい友人関係をもっている。	.02	.18	.27	-.01	.30	.03	.66
5, 私は, 勉強に積極的である。	.10	.14	.09	.06	-.05	.76	.68
25, 私は, 勉強の目標を持って, 毎日コツコツと努力している。	.13	.28	.18	.14	.00	.54	.71
29, 私は, ある程度勉強が出来る方だ。	.05	.02	-.02	.08	-.05	.29	.54
20, 私は, 授業をよく理解している。	.03	.09	.07	.19	.04	.25	.70
因子分散	3.52	3.04	2.80	2.80	1.82	1.63	15.58
寄与率 (%)	9.78	8.46	7.78	7.70	5.05	4.51	43.28

表2 学校適応感における性別・MPCの高低・LPCの高低ごとの平均値(SD)および分散分析の結果

A	B	C	N	教師関係	進路意識	特別活動	規則への	明朗さ	学習意欲	学校適応
SEX	MPC	LPC				への態度	態度			全体
男子	高MPC群	高LPC群	13	2.72(.83)	3.77(.87)	3.55(.77)	3.62(1.17)	3.08(1.21)	3.23(.73)	19.96(4.20)
		低LPC群	10	2.63(.96)	3.40(1.48)	3.77(.86)	3.38(1.19)	3.40(.62)	3.00(.78)	19.57(4.59)
	低MPC群	高LPC群	19	2.84(.63)	3.86(.70)	3.61(.56)	3.55(.65)	3.11(.51)	3.32(.63)	20.28(1.88)
		低LPC群	12	2.28(.60)	3.23(.99)	2.96(.71)	3.08(.75)	3.11(.70)	2.67(.86)	17.33(2.49)
女子	高MPC群	高LPC群	14	2.94(.76)	4.07(.92)	3.88(.78)	3.50(.78)	3.57(.56)	3.18(.82)	21.14(3.30)
		低LPC群	22	2.47(.95)	3.63(.72)	3.88(.88)	3.28(.79)	3.14(.72)	3.05(.92)	19.44(3.54)
	低MPC群	高LPC群	10	2.36(.30)	3.08(.99)	3.17(.75)	3.38(.67)	3.13(.67)	2.85(.78)	17.96(2.28)
		低LPC群	11	2.34(.86)	3.23(.78)	3.32(.54)	3.16(.82)	3.39(.79)	2.68(.93)	18.12(2.92)
男子 (A1)			54	2.62(.75)	3.57(.99)	3.47(.74)	3.41(.92)	3.18(.78)	3.06(.76)	19.29(3.37)
女子 (A2)			57	2.53(.82)	3.50(.89)	3.56(.82)	3.33(.76)	3.31(.70)	2.94(.87)	19.17(3.32)
MPC 高群 (B1)			59	2.69(.88)	3.72(.96)	3.77(.82)	3.45(.94)	3.30(.82)	3.12(.82)	20.03(3.79)
MPC 低群 (B2)			52	2.46(.67)	3.35(.89)	3.27(.67)	3.29(.72)	3.19(.64)	2.88(.81)	18.42(2.59)
LPC 高群 (C1)			56	2.72(.69)	3.70(.89)	3.55(.72)	3.51(.82)	3.22(.77)	3.15(.73)	19.84(3.09)
LPC 低群 (C2)			55	2.43(.85)	3.37(.96)	3.48(.85)	3.23(.85)	3.26(.71)	2.85(.88)	18.62(3.48)
A (SEX) の主効果				n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
B (MPC) の主効果				n.s.	* (高>低)	** (高>低)	n.s.	n.s.	n.s.	* (高>低)
C (LPC) の主効果				+ (高>低)	+ (高>低)	n.s.	+ (高>低)	n.s.	+ (高>低)	+ (高>低)
A×Bの交互作用				n.s.	+	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
A×Cの交互作用				n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
B×Cの交互作用				n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
A×B×Cの交互作用				n.s.	n.s.	+	n.s.	+	n.s.	+

+p<.10, *p<.05, **p<.01

考 察

1. MPC 得点及び LPC 得点の実態

LPC 得点と ASo 得点の間に高い負の相関 (−.843) があつた。これは、これまでの ASo と LPC との間に高い相関を示した Fiedler の研究結果とも一致するものである。一方、MPC 得点と ASo 得点との間にも、かなり高い負の相関 (−.550) がみられた。しかし、LPC との相関に比較すると低く、また、全体の得点分布を示す標準偏差が MPC 得点の場合 SD=13.52で、LPC 得点の SD=20.99に比べて個人差が小さいことを示している。このことは、ASo 得点を示す指標としては、Fiedler のいう LPC 得点が妥当であるといえよう。

2. MPC 得点及び LPC 得点と学校適応との関係

まず、仮説1について考察することにする。即ち、仮説1は、高LPCの生徒は、低LPCの生徒よりも

全体的に学校適応が高いであろう、というものであつた。

LPC 尺度18項目の合計点による LPC 得点では、『教師関係』『進路意識』『規則への態度』『学習意欲』及び『学校適応全体』において傾向差、すなわち高LPC群において、低LPC群よりも学校適応が高くなる傾向が見出された。ところで、傾向差が見出された『教師関係』『進路意識』『規則への態度』『学習意欲』はどちらかというと個人的活動に関わるモラル要因であるといえる。高LPC、すなわちLPC得点が高いということは、例えその教師との(いわば課題遂行上の)関係がぎしゃくしたものであつても、その教師の人物像については必ずしもネガティブには評価しないことを意味する。このことは、またMPC得点とLPC得点の差、すなわちAso得点が小さく、教師への寛容度が大で、心理的距離が小さいと解釈される。一方、「低LPC」の生徒は、苦手とする教師を、よりネガティブに評価するタイプであることを意味する。

同時に、ASo 得点が高く、両教師を峻別し、寛容度が低く、教師への心理的距離は大きいと解釈される。

しかるに、教師との心理的距離が小さく、教師群に対する寛容度の高いということは、生徒の対教師関係をより安定的なものにしているものと考えられる。これに対し、教師との心理的距離があり、寛容度が低い場合には、対教師関係は不安定な状態になりうるということが考えられる。こうした対教師関係の安定（不安定）性は、生徒の学校生活・活動への取り組み・意欲に大きな影響を及ぼすものと思われる。こうした対教師関係の安定（不安定）性が、高 LPC の生徒達の場合に、低 LPC の生徒達よりも『教師関係』、『進路意識』、『規則への態度』、『学習意欲』及び『学校適応全体』において高くなる結果をもたらしたものと考えられる。

次に、仮説 2 について考察することにする。仮説 2 は、高 MPC の生徒は、低 MPC の生徒よりも全体的に学校適応が高いだろう、というものであった。

MPC 尺度 18 項目の合計点による MPC 得点では、『進路意識』『特別活動への態度』及び『学校適応全体』において有意差（高 MPC > 低 MPC）が見出された。ところで、高・低 LPC 間では有意差が見い出されなかった『特別活動への態度』に、MPC の高・低間に差が見い出されたことは興味のあるところである。『特別活動』とは部活動、学級活動、学校行事等のことであり、いわば集団的活動である。内藤ら（1987）は、学校行事やホームルーム、クラブ活動への積極性や満足といった事柄は、全般的な学校生活への適応感と強い関連があることを示唆している。つまり、『特別活動への態度』における適応が高いということは、全般的な学校生活への適応感が高いと考えられる。「高 MPC」の生徒は、関係がうまくいく教師に対して非常に高い肯定的な評価を行っている。関係のうまくいく教師に対して、非常に肯定的な生徒は、部活動、学級活動、学校行事といった集団での活動に対しても積極的、自主的に取り組むものと考えられる。そして、そのような肯定的で積極的な姿勢によって、全般的な学校生活への適応も高くなるものと考えられる。

以上、まとめとして、個人差が大きいと考えられる LPC 得点（即ち ASo 得点の大・小）は『教師関係』『進路意識』『規則への態度』『学習意欲』といった個人的な活動における学校適応と関係があり、比較的個人差の少ない MPC 得点の高・低は、『特別活動への態度』といった集団での活動（部活動、学級活動、学

校行事等）における学校適応と有意な関係にあることが示唆された。

引用文献

- Fiedler, F.e., & Chemers, M.M. 1984 Improving leadership effectiveness: The leader match concept (2nd ed.). New York: John Wiley & Sons.
- 松山安雄・倉智佐一 1967 学級におけるスクール・モラルに関する研究（第 1 報） 大阪教育大学紀要, 4, 18, 19-36.
- 三隅二不二 1984 リーダーシップ行動の科学「改訂版」 有斐閣
- 三隅二不二・矢守克也 1989 中学校における学級担任教師のリーダーシップ行動測定尺度の作成とその妥当性に関する研究 教育心理学研究, 37, 46-54.
- 三隅二不二・吉崎静夫・篠原しのぶ 1977 教師のリーダーシップ行動測定尺度の作成とその妥当性の研究 教育心理学研究, 25, 157-166.
- 内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉令三 1987 高校生用学校環境適応感尺度作成の試み 兵庫教育大学研究紀要, 7, 135-145.
- 佐藤静一 1993 学級「集団」・生徒「個人」次元の学級担任教師の PM 式指導類型が生徒の学校モラルに及ぼす交互作用効果 実験社会心理学研究, 33, 52-59.
- 佐藤静一・服部正 1993 学級「集団」・児童「個人」次元の学級担任教師の PM 式指導類型が児童の学校モラルに及ぼす交互作用効果 実験社会心理学研究, 33, 141-149.
- 佐藤静一・篠原弘章 1976 学級担任教師の PM 式指導類型が学級意識及び学級雰囲気と及ぼす効果—数量化理論第Ⅱ類による検討— 教育心理学研究, 24, 29-40.
- 白樫三四郎 1985 リーダーシップの心理学 有斐閣
- 山口正二・米田光利・原野広太郎 1993 教師の指導態度と心理的距離に関する研究 カウンセリング研究, 26, 11-16.

「付記」本研究は、中武章子（現在、鹿児島大学大学院人文社会科学研究科修士課程 2 年：臨床心理学専攻：山中寛研究室）が平成 14 年度久留米大学文学部に提出した卒業論文の一部を加筆修正したものである。

Research on the psychological distance to a teacher and school adaptation in a high school student

AKIKO NAKATAKE (*Graduate school of humanistic-sociological sciences, Kagoshima University*)

SEIICHI SATO (*Faculty of literature, Kurume University*)

Abstract

This research considered the relation between the psychological distance to a teacher, and school adaptation for the high school student. The LPC (Least Preferred Coworker) measure was used for measurement of the psychological distance to a student's teacher. Consequently, in the school adaptation a "teacher relation", "course consciousness", "the attitude to a rule", "study volition", and "whole one", it became clear that the student with a small psychological distance to a teacher (LPC score is high) has the tendency for school adaptation to be higher than a student with a large psychological distance to a teacher (LPC score is low). And, in the school adaptation a "attitude to special activity" it became clear that the student who is doing a high evaluation to a best teacher to relate (MPC score is high) has the tendency for school adaptation to be higher than an student who is doing low evaluation to a best teacher to relate (MPC score is low).

Key words: high school student, psychological distance, school adaptation, pupil-teacher relationship

